

---

# 夜空を見上げて。

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜空を見上げて。

### 【Nコード】

N6790F

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

明日は新一と蘭の結婚式。けれど、そんな幸せの中、蘭が一人窓の傍で、夜空を見上げて物思いにふけるのは、マリッジブルーのせいなんかじゃなくて……。2008年度江戸川の日企画投稿注意：新蘭です。（追記：私のあらすじの表現で不快にさせていただきました方、12月15日PM10:00に変更させていただきました。申し訳ありませんでした）

コナンくん、あの日の約束、覚えてる？  
ねえ、コナンくん。

・・・会いたいよ。

夜空を見上げて

「蘭ねーちゃん、聞いて。・・・僕ね、お父さんとお母さんのところへ帰ることになったよ」

そういわれたのはいつのことだったろう。多分、高校3年の秋から冬へ変わるちょうど今  
みたいな頃だった。

お父さんとコナンさんと3人で、福島まで旅行に行き、その帰り道。サーブスエリアの駐車場に車を止め、早めに車に帰ってきた私たちは、お父さんが

戻ってくるのを車の外で待っていた、ちょうどそんな時。あの子は・・・。コナンくんは

唐突にそう言った。

うれしそうに、でも私のことを考えてくれているのか、申し訳なさそうに。言葉を選んで

いるのか、ゆっくりとした調子で。そうして、私から目を一度でも逸らさず。

あまりに突然のことだったから、びっくりして。でも、祝福しなきゃ、祝福しなきゃって思っ

ても、寂しくて。

新一ともあまり会うこともできなくて。そんな私をいつも支えてくれた、慰めてくれた

この子がいなくなったら私はどうしたらいいの？

思わずそんなことを考えちゃって。

・・・でも、泣いちゃいけない。気持ちよく送り出してあげなきゃ、ってそう思ってたのに。

「・・・僕ね、遠いところに行かなくちゃいけないから。これまでみたいに好きなときに

蘭ねーちゃんに会うことはできなくなると思うんだ」

ポツリ、そのときコナンくんはそう言った。私が泣きそうなのを必死で堪えていたのを

彼は十分わかっているようで。

ほら、また新一みたいな顔をして。苦しそうな顔をして……。まったくもう、そんな顔するから、だから縊りたくなっちゃうじゃない。

行かないで、って言いたくなっちゃうじゃない。

お願いだから、そんな顔しないでよ……。

私は思わず口元をかみ締めていたように思う。

彼と新一は別々の人間であるって頭ではわかっているはずなのに……。

コナンくんは新一の代わりではないのに。

それでも、どうしても、失うのが怖くて。離れていくのが怖くて。

『ひとりに、しないで』

あのととき、豪華客船の船の上で、コナンくんに言った言葉を、私はもう一度、彼に向けて

言いそうになっている。あのとときは、コナンくんの皮を被った『新一』に向けて。……もちろん、

誤解だったけど。

そして今度は、コナンくん『本人』に向けて。

……でも、言っちゃいけない。この言葉を。わかってる。わかってる。……けど。

はらり、はらり、と涙がこぼれ……。私はあわててそれを拭おうとした。

が。

さっと私の手を掴む小さな手にはっとする。

真剣な、コナンくんの顔。

どきん。

胸が強く波打った。

「でもね」

彼は言った。とつてもやさしい、けれど強い調子で。

「でもね、蘭ねーちゃん。僕、蘭ねーちゃんが僕を必要としてくれたとき、必ず  
ねーちゃんの下にかけつけるから……。本当に『僕』を必要と思  
つてくれるときだけ、  
僕が蘭ねーちゃんのところにかけてつけるから、だから……。泣か  
ないで、ね」

そう言つて、ポケットから取り出した青いハンカチ。

私は「ありがとう」ってそれを手にとった。

車体に背を預け、受け取ったハンカチで目頭を拭きながら、そつと  
見上げた空は。

・・・あの時も、満天に、星は瞬いていた。

・・・そして、今も私はあのときと同じように、こうして夜空を見上げてる。

「久しぶりにあのときのこと、思い出しちゃった」

部屋の窓越しに、私は一人、夜空を見上げる。

電気もつけず、しんとした室内。壁にかかっているウェディングドレスは、お母さんが私のために作ってくれたもの。

あれから、・・・新一が帰ってきて、彼と付き合い始めてもう7年が経っていた。

そうして、晴れて明日、私たちは結婚する。

幸せなとき、つらいとき、悲しいとき。

幾度となく私は、夜になると空を見上げ、彼を思い出した。

新一がいなかった1年数ヶ月。彼はずっと私の小さなナイトだった。ううん、体は小さかったけれど、存在は大人の誰にも負けないくらいで、

ピンチに陥ると必ずどこからともなくやってきて、私を守ってくれた。

でも、新一が戻ったとたん、いくらうれしい祝い事があって彼に報告したくても、

どんなに辛く悲しいことがあっても、彼に聞いてもらいたくても、新一とケンカして、慰めてもらいたくても、

彼は現れることは決してなかった。

それは、私があなただを本当に必要と思っていない、とあなたは言うてるの？

夜空を見て、問いかけた。

満天の星空を見上げ、幾度となく。

確かに毎回たわいのないことだったのかもしれない。

悲しいときはずっと新一が支えてくれたし、それでももちろん彼のおかげで救われ

たし。愛も、深まったように思う。

この5年、新一がいなくなる前とこの5年とじゃ、距離はぐっと縮まって。

新一を心から信じ、愛せるようになっていた。



コナンくんがいたら、もしかしたらこんなには距離は縮まっていなかったかもしれない。

ケンカをしても、二人でよく話し合って解決し、ピンチがあつたら必ずコナンくんではなく新一が助けにきてくれ、不安で寂しい夜は、彼がいつも隣にいてくれ、もし仕事で忙しくても、必ず電話はつながっていて、3日も経てば必ず帰ってきてくれた。

だから、距離はぐっと縮まった。

もし、コナンくんがいれば、私はきつと前みたいに、新一がいない時間を彼と共に

過ごし、新一には言えない言葉を、弱音をコナンくん話しちゃつてたんだと思う。

そうして、彼は小学生とは思えない大人びた言葉を、私がほしかった言葉を、

きつと新一みたいに話してくれたんだと思う。そうして、私はきつと、満足しちゃった

んだと思う。

だから……。

……でも。

……それでも、やっぱりどうしてもコナンくんに会いたいって思うことは今までたくさんあつたんだよ？

そして、今日みたいな夜は、特別に……。

彼に、会いたい。

窓を開ければ、すう、と涼しい風が顔全体をやわらかく包み込んだ。10月の初めの風はとても涼しい。あと1ヶ月もすれば寒さで窓も開けたくなくなるけど。

今は、こうして窓を開け、空を見上げることができる。

いつたい、いつ振りだろう。

こんな風に夜空を見上げ、彼と話したあの日のことを思い出すようになったのは。

そして何より、

いつたい、いつ振りだろう。

こんなきれいな星空を見ることができたのは。

ここ数ヶ月、結婚式の準備で忙しく、とくにこの1ヶ月は落ち着いて空を見ることがなかった。

だから、夜の空がこんなにきれいで、こんなに星が瞬いていたなんて思うこともなく。

こんな都会で、しかも何年も住み慣れてきたこの自宅で。まさか、こんなに輝く星を見ることができなんて。

・・・もちろん、あの時の夜空と比べてしまえば、ちっばけな夜空かもしれないけど。それでも、二十数年生きてきて、自宅でこんなに多くの星を見たことがなく。

「コナンくんも、同じように空を見てるのかな」

コナンくんはきつと知らない。

私がこうして、結婚式の前日に空を見上げてるなんて。

あの日の約束を思い出しているなんて。

送った招待状の返事を待ち続けているなんて。

それでも、諦めきれなくて、披露宴の家族の席にあなたの名前を、席をちゃんと1人分設けて

あるなんて、決して知らないでしょう。

でも、期待しちゃうの。

昔みたいに、新一みたいに。

ピンチのときとか、いてほしいときに。ギリギリになって、遅刻しても、それでも。

ハアハアと息を切らして、一生懸命な顔でやってきて。

『蘭ねーちゃん!』

そんな風にやってくるあなたを期待しちゃう。・・・そんなわけ、あるはずなのに・・・。

大好きな新一と晴れて夫婦になる。不安なんてないし、きっとこの先も感じることは決まらないと思う。コナンくんを頼ることはもしかしたら、新一がそばにいる限り、もしかしたらないのかもしれない。

けれど、そんなこと抜きで、私はあなたに会いたい。

ただ、一言。あなたに、『おめでとう』と言ってほしい。

あなたは、大切な『家族』だから。時には『弟』で、時には『兄』の、とっても大切な『家族』だから。

あなたを、愛してるから。

「コナンくん・・・」

私は、夜空を見上げ、呟いた。

「会いたいよ・・・、コナンくん」

そんなとき。コツンと何かが軽く開けていない方の窓に当たったよ  
うな気がして、私はびっくりして、下を見た。

そこにいたのは、中学生のくらいの。

新一によく似た、そして幼い日の『彼』の面影を残す、めがねをか  
けたその男の子で。

私は思わず目を見開いた。

私が今、一番会いたかった相手。

「ウソ……」

私は思わず呟いた。

彼が。

大きくなったコナンくんが、そこにいた。

「蘭ねーちゃん」

サッカーボールを軽くポンポンとつま先で蹴り上げながら、彼はにこつと微笑んだ。

「なつ、こな・・・コナンくん！？ホントにコナンくんなの!?!」

「うん。・・・そーだよ」

「ちよ、ちよつとそこで待ってなさい!」

「だいじょぶだよ・・・。逃げもかくれもしないから・・・」

いつか、どこかで聞いたようなセリフを耳にしながら、私は階段を駆け下りる。

どうして。

どうして、彼が。

夢なら、覚めないでいて。

私はそれを願いながら、玄関のドアを開けた。

そこには、彼が。

コナンくんが、立って、笑ってた。

「・・・こな・・・」

「や。．．．久しぶり。．．．7年ぶりだね、蘭ねーちゃん」  
「っ！！！！！」

思わず、彼を抱きしめた。強く、強く、彼を。

自分よりまだまだ小さい彼は、それでもあのころより格別に大人になって。

きつとあと3年もしたら抜かされるんじゃないかなって思うくらい。抱きしめた彼は少したくましくなっていて、ちよつとだけ恥ずかしくなる。

「どうして．．．!?!?」

「招待状。．．．送って、くれたでしょ?」

彼の手からはきれいなままの招待状。

ああ、そっか、と呟きかけて、その招待状が未開封だということを知る。

そうしてその答えを頭の中で見出した。

きつと、彼が次に言う言葉は．．．。

「ごめん、明日は行けない。蘭ねーちゃんの幸せそうな顔、一番近くで見えてあげたかったけど」

ごめんね。

彼はもう一度呟いた。

7年ぶりに会う彼は、まだ声変わりもできてないようだ。

そんなところまで中学生のころの新一に似ている。でも、今の彼はあのときの

新一より格別に大人びていて。

私はふるふると首を横に振った。

今までどこにいたの？どうして、連絡をくれなかったの？

私の言葉は、喉まで出掛かっていた言葉は、どうしても口に出すことができない。

涙が喉に詰まって、一緒に言葉まで飲み込んでいた。言葉に、ならなかった。

「僕ね、あんまりここにいられないんだ。きつとこの先、やっぱりまた会えない時がくると思うけど……。でも、今日は蘭ねーちゃんに言いたかったんだ。一番に、蘭ねーちゃんに祝福したかった。明日のためにきれいになっていく蘭ねーちゃんを、隣でじつと見ていたかった」

「……コナンくん」

まったく、何マセたこと言ってるのよ。

そんなセリフ、どこで覚えたのよ？

ちょっとだけ、意地悪なことを思ってもみてしまっ。

自分の知らないところで、彼は確実に成長していく。大人になっていく。

そうして、彼はきつとこの先も、私と知らないところで生きていくんだなあ、と、急に悟ってしまった。

涙が出そう。でも必死になって飲み込んで。必死に耐えていた。けど、

どうにもならなくて、涙が、はらりはらりと……。



水滴になって、落ちていった。

そして出されるのは、あの時と同じ青いハンカチ。

「・・・！」

「約束、覚えてる？」

あのとぎとはさらに大人びたその表情で、彼は尋ねた。

「もちろん。・・・忘れたことなんて、・・・なかったわよ」

ようやく、私は言葉に出してその言葉を言った。

「もう、帰ってくることは、ないの？」

「・・・蘭ねーちゃんが僕を本当に必要としてるとき、もしかしたらあるかもしれない。そして僕が蘭ねーちゃんに絶対会わなくちゃいけないって思ったとき」

「何、それ・・・」

私より10も下の癖して、どうしてそんな大人びたことを言うの？あのとぎとまたちよつと違う言い方で。それは中学生になって『思春期』になったからだろうか。

それとも・・・。

「僕ね、蘭ねーちゃんに次に会うときは、この日だっずっと決めてたんだ」

高く、高く。漆黒の夜空に輝く星を見上げながら、彼はポツリと呟いた。

「僕、蘭ねーちゃんのが好きだよ。・・・7年前から。蘭ねーちゃんのもとに居候を決め込んだときから。・・・うっん、出会う前から蘭ねーちゃんが好きだった」

「え・・・？」

「だからね、僕は蘭ねーちゃんが困ってるとき、辛いとき。ずっと支えていこうって心に決めてたんだ。守りたいってずっと思ってた。蘭ねーちゃんがあるころ、守れなかった新一にーちゃんの代わりに僕を見ていたことは知ってた。だから僕は新一にーちゃんの代わりに蘭ねーちゃんのそばにいた。

「いたかった。けど、もう僕は必要なくなっただ、そう思った。だけど・・・」

「そんなことない！！！！」

私は思わず叫んだ。「え」と、彼はびっくりした顔で私を見つめる。

「あなたは新一の代わりじゃない。・・・あなたは、『あなた』よ。コナンくんとしてちゃんと好きなのよ？」

「だからそんなこと、言わないで。ずっと、ずっと・・・会いたかったんだから！！！！」

そう、会いたかった。

だから、そんな悲しいこと、言わないで。会いたいと思つたら、会いにきてよ。

私はあなたの居場所を知らないんだから・・・。

「・・・ずっと、そばにいて。・・・あなたは、私の大切な『弟』なのよ？『家族』なのよ？」

ぎゅ、と彼のシャツの裾を握り締め、私は涙も隠さず、そう言った。

「ごめんね、それはできないんだ・・・」

ポツリ、彼は呟く。目を伏せ、とても悲しそうに。けれど、次の瞬間、さっと顔を上げ、強く私の顔を見た。

「でも・・・僕もやっぱり思うんだ。僕は僕として、蘭ねーちゃんが好きだから。新一にーちゃんができないこと。こうやって明日花嫁になる蘭ねーちゃんの隣で、家族としてそばにいてあげられること。

おめでとうって祝福してあげること。不安を取り除いてあげること。それは絶対したかった。『江戸川コナン』として、ちゃんと祝福してあげたかった。だから、やってきたんだ」

「コナンくん・・・」

そっと私の手を握る、骨骨したその手。

7年前の、あの小さなふつくらとした手じゃなく、もう大人に少しずつ近づいたその手。

「おめでとう、蘭ねーちゃん。幸せにね」

にっこり笑って、コナンくんは言った。

その微笑に、私はまた、泣いた。

「だいじょうぶ。僕はずっとそばにいるよ」

朝が来た。

今日は新一との結婚式当日。

私はウエディングドレスを着るための準備を始めている。

私の隣には、ううん、・・・もうこの家には、コナンくんはいない。  
あの後、彼はすぐに私の元を去っていった。

もう戻らなくちゃ。行かなくちゃいけないところがあるんだ。なん  
て、新一

みたいなことを言って去ってしまった彼。

まったく、あと3年もしたら彼はどうなってしまうんだろう。

新一よりもクセが悪いような気がして、とっっても心配してしまう。  
ずっとそばにいれば、『姉』として、コナンくんをずっと見てあげ

るのに。

ビシバシ鍛えてあげられるのに。それがとっても心残りで。

でもね。

でも、昨日までの気持ちとやっぱりちょっと変わっていて。気持ちがすーっと楽になっていて。

それは、やっぱりコナンくんとちゃんと会えたから。

おめでとうと祝福してもらったから。

そばにいるよって、そう言ってくれたから。

大丈夫。きっと、また会える気がする。

それは本当に少しの時間かもしれない。だけど、きっとまた会える。こうして空が続いてる限り、彼を本当に必要としている限り、絶対また会える。

そのときは、泣いてばかりの顔なんて見せることのないようにしよう。

笑ってばかりの顔を彼に見せよう。

軟弱な彼の気持ちを少しでもよくしなくっちゃ。

おいしくて、栄養のあるものを彼に食べさせてあげなくっちゃ。

ねえ、コナンくん。

そのときまで覚悟、しときなさいよ。

私は思わずくすりと笑った。



(後書き)

えーと、今回は2008年度江戸川の日の作品を投稿してみました。これは、全然頭に浮かばなくて、とうとう締め切り日になった日、最後の最後で3時間で仕上げた話です。文章に粗があったりするかもしれませんが、お許しください。

ちなみに、中学生コナンが登場するのは……。

……志保さんによる医学の成果、ということ……。よろしく  
お願いしまーす！

志保さんはできる子だ！きつとできたんだ！って期待を込めて……

(笑)

何かしら調査を変えると、変わるのかしら(笑)。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6790f/>

---

夜空を見上げて。

2010年11月27日23時34分発行